The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学習者の個別性について ： 韓国人日本語学習者の日本語、日本人 ・日本社会に対する態度変化を中心に
Author(s)	朴, 世稀
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49468
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	朴（パク）　世（セ）　稀（ヒ）
博士の専攻分野の名称	博　士（日本語・日本文化）
学　位　記　番　号	第　２２５２６　号
学位授与年月日	平成 20 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**日本語学習者の個別性について－韓国人日本語学習者の日本語、日本人・日本社会に対する態度変化を中心に－**
論文審査委員	（主査） 准教授　真嶋　潤子 （副査） 教　授　岸田　文隆　　教　授　苧阪満里子　　教　授　鈴木　　睦 准教授　筒井　佐代

論　文　内　容　の　要　旨

1. 研究課題

本研究は、第二言語習得研究の個別性研究の分野において学習者の態度要因に焦点を当てた実証的研究である。研究対象を韓国人日本語学習者とし、「韓国人日本語学習者の日本語、日本人・日本社会に対する態度変化のプロセス」について論じている。

従来の韓国人日本語学習者に関する研究においては、意識調査や実態調査の形での量的研究が多く見られた。これらの研究においては、韓国人日本語学習者の持つ対日イメージは「複雑である」と結論付けられていることが多いのだが、どのように、何故、複雑なのかといった点に関しては具体的に明らかにされてこなかった。この対日イメージが、韓国人日本語学習者の日本語能力の向上や日本人・日本社会と接触量の増加に伴ってどのように変化するのかといった過程に焦点を当てた研究も殆どなされていない。そのため、日本語教育現場への応用の問題が残されていた。したがって本稿は、韓国人日本語学習者の日本語、目本人・日本社会に対する態度の変化プロセスを明確にし、先行研究で残された問題に対する解決策を探ることを目的にする。

2. 研究方法

本稿では、第二言語学習者の態度要因を様々な環境要因との相互作用によってダイナミックに変化していくものとして捉え、特に韓国内で日本語を学んできた学習者が来日してから経験する態度変化に焦点を当てている。

本研究は上述のとおり、量的研究方法では見落とされてきた学習者の認識や感情の変化の様子をより深く考察するために、質的研究方法を用いた。データは半構造化インタビューの手法で韓国と日本で日本語を学習している韓国人18人の分析焦点者を対象にして収集した。また、収集されたデータは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ手法によって分析した。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチとは、収集データを基に帰納的に「概念」と「カテゴリー」を生成し、新しい仮説を構築していく最近注目されてきている質的研究方法の一つである。また、このアプローチは、最終的には得られた研究結果を現場へ応用することを目指しているものであるため、日本語教育現場に役立つ実践的研究になることが期待できた。

3. 韓国人日本語学習者の日本語に対する態度変化のプロセス

日本語選択時の「韓国人日本語学習者の日本語に対する態度変化のプロセス」は、日本語を専攻している人と副専攻として学んでいる人とで大きな差があった。日本語専攻者は、日本語を将来の仕事と関連付けて捉えている道具的動機を主に持っていたのに対して、副専攻として日本語を学んでいる人からはこの様な道具的動機は殆ど見られなかった。彼らの意識の中では日本語選択時から、インタビュー時に至るまで、日本語学習の「日本大衆文化を楽しみながら勉強も兼ねる」という側面が強調されており、将来の就業に積極的に結び付けられてはいなかった。その反面、日本語専攻者は、「日本大衆文化への興味」より「第二外国語としての経験」、「学び易さ」、「状況的理由のため」という選択動機付けを持っている傾向が強かった。

また、韓国での日本語学習が進むにつれ、「日本語は学びやすい」という認識から「日本語は思ったより難しい」という認識に変化する「日本語学習に対する再認識」、日本語は英語に比べて実用的な価値が低いという認識から生じる「英語に対する心残り」を感じていることが分かった。

そして、日本語専攻者にとって必須の「日本語能力向上」という課題を解決するために留学を選択することが分かった。また、日本留学は、日本語能力向上という目的だけではなく、「英語に対する心残り」に対する代替案、他の韓国人日本語学習者に対する競争心と優越感の要因が強く作用していると解釈できた。

日本語専攻者（特に留学経験者）のこの様な心的経験は、日本語を生計手段として捉えていることと深く関連していると見られ、本稿では「生計手段としての日本語」という概念を韓国人日本語学習者（特に日本語専攻者）の態度変化を説明する重要なキーワードとして扱った。

4. 韓国人日本語学習者の日本人・日本社会に対する態度変化のプロセス

「韓国人日本語学習者の日本人・日本社会に対する態度変化のプロセス」として、日本留学の前後での変化が明確に表れたことは注目に値する。

留学以前に持っていた対日イメージの特徴をみると、「対日イメージ形成における受動性」を強調していた分析焦点者が殆どであった。つまり、否定的な対日イメージを持っていたとする学習者は自分自身のその否定的対日イメージ形成には韓国の歴史教育とマスコミの影響が大きかったと分析しているのである。この様に自分自身の対日イメージに対して客観的な態度で評価できるのは、韓国内での日本語授業を通じてイメージ変換の刺激を受けていたためであると考えられた。

もう一つの特徴として挙げられるのは、本研究の分析焦点者は日本に対する肯定的、否定的な態度のいずれも同時に有していることであった。さらに彼らの日本に対する肯定的な態度が「日本語の勉強が好き」、「日本の音楽が好き」、「日本のファッションが好き」のように明瞭で具体的であるのに対して、否定的な態度はぼんやりして漠然としたものであることを明らかにすることができた。また否定的な態度は主に両国の歴史的・政治的問題に対する態度であることが分かった。この様な傾向が見られるのは、両国の歴史的・政治的問題と、それ以外の側面において、これらを評価する物差が複数存在しているためではないかと解釈できた。

留学後の態度変化として最も顕著に表れたのは、日本に対する事前イメージの崩壊である。来日した韓国人日本語学習者の対日イメージの変化は、ある特定の決められた過程を経るというより、学習者自身が持っている日本に対する期待値の度合いによって肯定的、または否定的に変化していくと考えられた。また、学習者の期待が現実と離れていればいるほど日本での生活適応に困難を経験する可能性が高いと考えられた。

本稿では、韓国人日本語学習者が日本に対する期待と現実の間を調節していく過程を二つの側面で扱った。一つは「衝突の場としての日本」というカテゴリーで説明され、もう一つは「和解の場としての日本」として位置づけられた。「衝突の場としての日本」とは、韓国人日本語学習者が、特に両国の歴史的・政治的問題を扱う場面に遭遇したときに、韓国人である自分自身の立場と日本人の立場が異なっていることを実感したり、日本人の外国人（特に韓国人）に対する偏見と差別を経験すること、また、日本人・日本社会のルールが理解しにくいものであった時に葛藤したり、さらには日本人とのコミュニケーション意欲を喪失し、日本人との人間関係の構築を諦めてしまうことを意味する。これは、韓国人日本語学習者が日本人・日本社会との衝突、その後の葛藤、困難を経験し、諦めることで、日本に対して持っていた期待感が崩れてしまう不快な経験である。

このような経験は、教室外だけではなく教室内で、日本人教師との間で歴史的・政治的問題に関する話題が持ち上がったときにも感じている場合があることも明らかになった。教師が学習者との問題を敢えて回避しようとする態度、若しくは、中立的な立場で学習者を説得しようとする態度が却って学習者の葛藤の原因になりうる可能性があることが指摘できるのである。

「和解の場としての日本」というカテゴリーでは今までは一方的に反日教育を受けてきた韓国人として両国の問題をみてきたが、来日後、徐々に日本の立場からも歴史的・政治的問題について考えてみることができるようになったという経験をまとめた。つまり、分析焦点者が一方的な立場から中立的、もしくは、第三者の立場になっていくということを意味している。

また、今までは日本人の親和性に関して持っていた否定的な態度が日本人に恩恵を受けることによって肯定的に変化すること、理解しにくい日本人・日本社会の言語行動を理解するようになり、そのルールに自分自身を合わせていこうと努力していることが明らかになった。

この様な「和解の場としての日本」の経験は、自分自身と日本の間に広がる距離を縮めていくきっかけとして作用し、否定的な対日イメージが好転していくことを意味する。

「衝突の場」または逆に「和解の場」としての日本を体感する、という経験は、その経験によって引き起こされる肯定的、否定的な感情とは関係なく、いずれも日本語能力向上意欲をプラスに刺激することが分かった。特に、日本語能力が低い学習者の方がこの様な傾向が強いと考えられた。

従って、本稿では韓国人日本語学習者が自分自身と日本社会の距離を置いたり縮めたりする行動は「とるべき適切な距離」を調節しているのであり、ここでいう「とるべき適切な距離」とは、

「予定どおり無事に学業を終了させるためにとるべき距離」であると解釈した。

5.考察と日本語教育現場への応用

日本語学習者が最後まで日本語をマスターすること、予定通り学業を無事終了し、学位を取得することは、すなわち将来日本語能力を生かした仕事に従事したいという、自分の目標の実現可能性を高めることを意味する。つまり、「とるべき適切な距離」は「生計手段としての日本語」を支えているのであり、それまで「分離」していた「日本語学習」と「日本人・日本社会」に対する態度が「統合」へと変化していくことであると解釈できた。さらに「とるべき適切な距離」とは、自分自身と日本人・日本社会の距離が近すぎることによって生じる日本人・日本社会との葛藤から身を守り、心理的安定が保たれる距離という意味を持っていると解釈でき、「安全距離調節」という概念を用いて韓国人日本語学習者の日本語、日本人・日本社会に対する態度変化のプロセスを説明している。

このように、本研究の結果を踏まえ、日本語教育現場への応用を考えると、韓国人日本語学習者に対する日本人・日本社会の「言語行動文化教育」の重要性が強調されるべきだとする示唆が得られるのではないかと考えられる。例えばただ単に言葉の意味だけではなく、その中に込められている意図や内容についてじっくり考えてみる、自国の文化と照らし合わせてみる、実際に経験したことについて皆で話してみる機会を与える、などといった授業活動の可能性である。特に来日初期の学習者にとって、このような「言語行動文化」に関する授業は日本での生活を円滑にするための手助けになると考えられるとはいえ、上述の通り、歴史的・政治的問題に話が及ぶ場合は、学習者の葛藤に繋がる可能性があることを教師は十分理解しておく必要があると思われる。

以上、本稿では、生のデータに基づき韓国人学習者の心理的経験について詳細に記述することができた。また、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの方法を用い明らかになった、韓国人日本語学習者の日本語、日本人・日本社会に対する態度変化のプロセスは、今までの先行研究で明確に提示できなかった、韓国人日本語学習者の複雑な心境を理解するための重要な手掛かりとなると考えられる。また韓国人日本語学習者の留学生活を支援する教師にとっては実践的アドバイスとなり得ることを期待する。

6. 本研究の限界と今後の課題

学習者が目標言語社会に適応しながら、日本語を学んでいくメカニズムは複雑で一つの理論で説明しようとするのには無理がある。本稿で提示している「安全距離調節行動」もそのメカニズムの中の一部として捉えられるべきであり、安易に一般化して考えられるべきではない。

今回の分析焦点者は日本での生活に適応しようと努力しながら大学で日本語学習に励んでいる者、または予定どおりに留学生活を終えて帰国していた者があるが、実際には、日本留学途中で学業を諦め、退学してしまう学習者も存在する。つまり、上手に「安全距離調節」を行っている人もいれば、失敗した人もいると思われる。そういった意味では、韓国人日本語学習者の日本社会に対する適応過程について半分しか扱っていないことになり、本研究の限界でもある。そのため、本稿では扱わなかったがこういった「不適応のプロセス」も明らかにし、「適応のプロセス」とはどのように異なっているのかとった問題についても追求すべきであると考えている。また、学校以外の教育機関での日本語学習者や、教育現場の日本人教師、友人といった日本語母語話者なども研究対象として視野に入れて考察することも、来日留学生の経験を全体的に捉えるためには意味のある手法であると思われる。今後の研究にはこういった試みが求められると考えられる。

論文審査の結果の要旨

【1】　論文概要

本稿は海外での日本語学習者数で第1位である韓国人学習者を対象に、学習者の個別性の研究の視点から、日本語学習にまつわる態度や動機を、動的なもの、ダイナミックなものと捉えて、その姿に迫ろうとした意欲的研究である。

日本と韓国は、相互に非常に重要でありながら「近くて遠い国」と言われるように、プラスとマイナスの相矛盾する関係や意識を持っており、従来韓国人日本語学習者の学習動機や態度は「複雑である」と結論づけられることが多かった。

先行研究においては学習者の動機や態度に関する研究は、アンケート調査等の手法による量的研究や、質的研究の場合は事例研究が一般的であったが、本研究では学習者の生の声を慎重に集め、それを理論に基づいて分析することで従来の研究では捉えられなかった学習者の感情や考えの変化に迫ろうとしたものである。具体的には、韓国と日本で収集された18名の分析焦点者について半構造化インタビューの手法で集めたデータを文字化し、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）」に基づいて分析し、仮説構築に至っている。学習者の意識や心の動きに深く踏み込んだインタビュー結果をデータとして、先行研究を越える説得力のある分析結果が提示されている。

分析の結果、韓国人日本語学習者の「日本語に対する態度変化」と「日本人・日本社会に対する態度変化」を分け、それぞれに出てきた複数の概念とカテゴリーを、今度は「日本語選択時と学習中」と「留学前と留学後」という時間軸に位置づけてなされた解釈が展開されている。

学習者の個別性を踏まえた指導ができる日本語教員を養成する上で、非常に示唆に富む結果が提示されている。

【2】　研究結果とその意義

本研究で明らかになったことは、概略以下のようである。

・日本語学習者の日本語に対する態度には、「専攻／副専攻」による差がみられる。

・副専攻学生は、日本の大衆文化を楽しむ「娯楽としての日本語」という選択動機が顕著である。（留学しない場合はそのまま）

・専攻学生は、就職と結びつけている者が多い。また、中等教育での「日本語は学びやすい」という経験から、「成功への期待感」を持っている。英語専攻には劣等感を持っていることも多く、「次善策としての日本語」というカテゴリーが明示されている。

・日本語学習が進行する中で、「日本語に対する再認識」が起こり、思ったより難しいとか、英語にすればよかったといった「心残り」を経験している。

・その「心残り」への代替案、競争心といった理由から、日本への留学をする者が多く、「生計手段としての日本語」の色合いが濃くなってくる。

・「日本人・日本社会に対する態度変化」のプロセスは、日本留学の前後で興味深い変化が捉えられている。

・留学前に受動的に得ていた歴史教育やマスコミの影響による対日イメージが形成されていたものが、留学後、客観的に見直される。日本に対する「好き嫌い」は複雑だが、「好き」なものが具体的かつ明確であるのに対し、「嫌い」なものは「漠然とした嫌悪感」であることが指摘されている。

事前イメージが崩壊するという経験をする学習者の体験は、留学以前の期待値によって現実との差が大きければ大きいほど日本での生活適応が困難になるようである。来日後、「衝突の場としての日本」というカテゴリーで説明される苦しく辛い体験や、日本人とのコミュニケーションへの意欲をなくしてしまうような体験が一方であり、他方「和解の場としての日本」と呼ばれる様々な経験がある。日本の立場で考えられるようになったり、日本人に対する偏見がなくなったりする経験である。

このようなプラスとマイナスの経験から、適切な距離をとろうとする「安全距離調節」を行おうとしていると解釈できる。それは、「生計手段としての日本語」の習得を「心理的安定」を保ちながら得るという学習者の方略であり、「日本語のマスター」「学業修了」という目的地にたどりつくように統合しようとしていると解釈できる。

本研究では、とりわけ「衝突の場としての日本」と「和解の場としての日本」が統合されることを「安全距離調節」という概念で説明した行は、説得力を持ち評価できる。また、「日本語」と「日本人・日本社会」への学習者の態度を、分けて捉えて分析し、その後「統合」する道筋を示したことは、妥当だと評価できる。

複雑に絡み合った学習者の認識を、彼らの生の声を分析することで、うまく解きほぐし、読者にわかる形で提示することに成功している。本稿は、研究手法の点（手堅くM-GTAを活用した研究事例であること）でも、内容的に特に日本人で日本語教員を志す者が参考にできる点が多いことにおいても貢献度が高く、先行研究を超えたこの分野における優れた業績であると評価できる。

韓国人日本語学習者の個別性要因として、これまで何となくもやもやとして複雑だと言われてきたことを、冷静に分析し切った筆者の強靭な意思と忍耐力、そしてデータに誠実な態度は、高く評価でき、これはこの筆者であってこそなし得た業績であると審査員からコメントがあった点である。また、日本語も筆者の高い運用能力を示しており、よく推敲されこなれたものとなっている。

【３】論文の限界と総評

筆者の姿勢としては、研究目的として絶えず日本語教育の分野への応用を意識しており、日本語教育に携わる者が読んでおくとためになる参考書として存在価値が高い。今後の日本語教員養成の教材としても利用価値が高いだろう。

ただし、本稿で対象としたのは「韓国人」と一言で言っても、大学で日本語を学んだ経験のある、文系の高学歴者が対象となっているため、その研究結果が一般化されるには制限をつけねばならない。また論文中にも指摘されているように、日本語学習を途中で挫折してしまった人たちのことは不明であり、今後の課題であろう。

そのような一般化への制限はつくものの、本研究では、テーマ・研究目的・研究方法・データの質・分析方法・そして考察から結論に至る内容と、この分野への貢献度等の角度から総合的に判断した結果、本審査委員会は、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。